



## 本会記事

### ■Plasma Conference 2014 開催報告

運営・組織委員長 田中和夫 (大阪大学)

Plasma Conference 2014 (PLASMA2014) が、2014年11月18日から21日まで、新潟市の朱鷺メッセを会場として900人を超える参加者が集う国内最大のプラズマ科学の会議として無事開催されました。

この会議は、日本物理学会領域2 (プラズマ物理、今回の主担当) プラズマ・核融合学会、応用物理学会プラズマエレクトロニクス分科会の3学会が主催となり、日本学術会議の後援をうけ、核融合科学研究所と大阪大学の共催として開催されました。20を超える国内のプラズマに関連する学会も協賛としてご参加いただき、文字どおり国内最大のプラズマ科学の祭典と位置づけることができました。

2011年の金沢で開催された第一回大会に続くこの第二回目開催における留意点は、

- (1) プラズマ科学の基礎から応用までを網羅し、
  - (2) 3学会の協力のもと、融合・連携したプログラム編成、
  - (3) 若手研究者を重視
- することでした。

このため、安藤晃先生 (東北大学) を委員長とした「プログラム等検討委員会」を金沢での PLASMA2011開催直後から発足させ、十分な時間をかけて3学会関係者で議論を尽くし、会議の方向性の具体化を確認することができました。

現地実行委員会は、小椋一夫委員長 (新潟大学) により、運営委員会、組織委員会、事務局と効率よく連携して会議運営が非常にスムーズに運びました。開催の経緯、開催に至る現地の努力、開催期間中の諸課題などは、この記事に続く「現地実行委員会報告」に詳しく書かれています。

組織委員会は、基調講演者の推薦、企業展示への出展の紹介を積極的に支えました。3学会の代表などから構成された運営委員会は、メールによる議論を常時積極的に行う

ことで効率よく会議開催をリードすることができました。また、日本物理学会領域2の若手を含む役員は、領域代表斉藤輝夫先生 (福井大学) のもとに主担当である責務を、自らが考えながら実行していくという創造的な役割を果たしました。プラズマ・核融合学会事務局には、会議開催に向けたサポートおよび開催期間中の会議運営を全面的に支援いただきました。

プログラム委員会では、米田仁紀委員長 (電気通信大学) のもと、3学会を中心とした43名の委員が、互いの垣根を乗り越えるために、(1)7つの共通カテゴリによる講演分野分け、(2)対象となるプラズマのパラメータでのポスター会場の配列、(3)著名な講師によるレクチャーコース、(4)軽食サービスを利用した長いポスター講演時間、(5)若手相互審査を含む参加学会統一若手発表賞 (PLASMA2014若手優秀発表賞) の設立、といった新しい試みに大胆に取り組みました。この若手優秀発表賞では、審査対象を30才未満とし、220件の申請に対して、150名の審査員が会場で審査にあたりました。その結果、20名の若手研究者の研究に賞を授与することができました。

会場にて、公式プログラム冊子および予稿集データの入ったUSBとともに配布した参加者アンケートでは、以下に記すような集計結果となりました。ある参加者からは、「APS (アメリカ物理学会) で、感じるような高揚感を味わうことができた」という感想もいただきました。

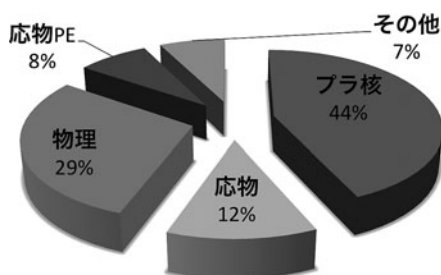
この会議は、この新潟大会を経ることで、定常化への道筋がついたこととなります。今後は、アジアとの連携も視野に入れた取り組みが望まれます。この会議の成功を受けて今後、プラズマ科学分野が一層の発展を遂げることを希望いたします。

最後に、この会議を成功に導くためにご尽力いただいた多くの関係者に感謝申し上げます。ありがとうございました。

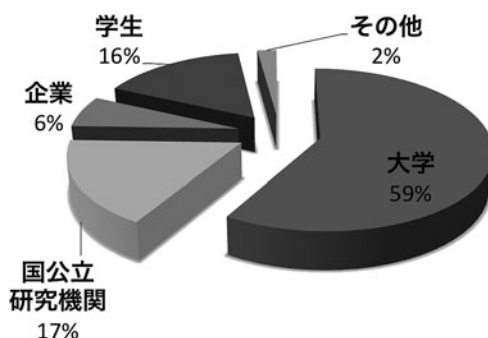


アンケート集計結果 回収数95枚

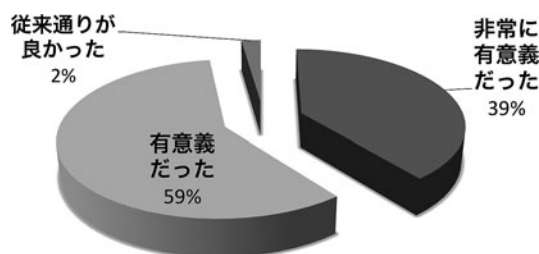
設問1. 所属している学会 (該当するもの全てに○)



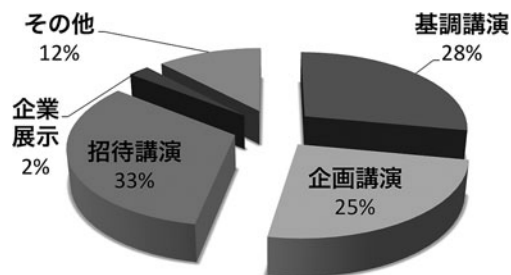
設問2. 所属あるいは身分 (該当するもの一つに○)



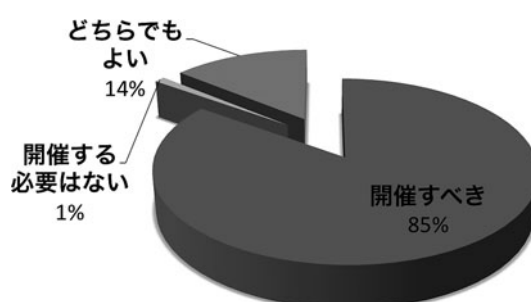
設問3. 今回の Plasma Conference 2014 に出席された感想を聞かせてください。  
(該当するもの一つに○)



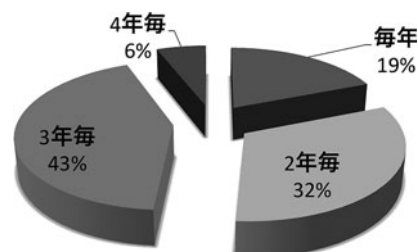
設問4. 今回の会議で興味深かった企画を挙げてください (複数回答可)



設問5. Plasma Conference を今後も継続して開催するかどうか (該当するもの一つに○)



設問6. (前の質問で①開催すべきと答えた方に) 望ましい開催周期について (該当するもの一つに○)



■Plasma Conference 2014 現地実行委員会報告

現地実行委員長 小椋一夫 (新潟大学)

Plasma Conference 2014 (PLASMA2014) が、2014年11月18日から21日まで、新潟市の朱鷺メッセを会場として開催されました。今回は日本物理学会領域2を主幹事学会として、プラズマ・核融合学会、応用物理学会プラズマエレクトロニクス分科会の3学会 (PLASMA2014幹事学会) が合同で開催するもので、初回の金沢市における PLASMA 2011に続き、第2回目となります。初回の様子は本学会誌に報告されています (Vol.88, No.1, pp.60-62)。それによりますと、参加人数の予測の難しさや会場変更など、初回ならではの苦労があったことがよく理解できます。その後、田中和夫先生 (大阪大学) が委員長を務める組織委員会を中心に開催地選択の議論があり、新潟を候補地とし私に現地実行委員長をとという話を2012年頃にいただいたと思います。2013年の春には、新潟開催に向け様々な立場から開催に向けて努力を続けていた幹事学会代表の安藤晃先生 (東

北大学) と会場を下見に行くなどの現地活動が始まりました。

会場となった朱鷺メッセは展示場、会議室、ホテルなどが一体となった複合一体型コンベンション施設で、大規模な国際会議にも対応できるものです。組織委員会や米田仁紀先生 (電気通信大学) が委員長を務めるプログラム委員会の方針に基づいて準備しましたが、前回金沢でのデータが大いに役立ちました。

1年前の2013年には本番とほぼ同じ時期の11月27日に幹事学会の物理学会領域2代表である齊藤輝雄先生 (福井大学) を含むプラズマ科学連合現地実行委員会を朱鷺メッセで開催して会場の下見も行い、懇親会の会場についても現場を見ながら調査しました。懇親会の会場を決めるにあたり、決定的な要因は収容人数でした。ここでも前回のデータは活かされており、朱鷺メッセに隣接する懇親会会場では300人を超えると一部屋では狭いと判断されました。一カ所で収容でき、本学会にふさわしい会場としてホテル

オークラ新潟での開催を決定しました。また、現地の運営体制に対する懸念がありましたが、新潟大学に加えて、長岡技術科学大学、長岡工業高等専門学校、新潟工科大学の先生方から協力を得て現地体制を整えました。

会場の朱鷺メッセは多くの参加者が宿泊する新潟駅周辺から少し離れたところにあり、移動のことを考えますと、11月の下旬にかかるということで、天候に不安がありました。荒れた天気ですと、新潟で生活している私でも、この距離の移動はなかなか大変です。PLASMA2014の本番では開始前日に天候が少し荒れましたが、開催期間中はまずまずの天気で、後半は穏やかな日和もありホッとしました。会場屋上から佐渡島が見えた方もいらっしたかと思えます。

今回の講演数は基調講演4件、招待講演39件、一般講演671件(口頭発表213件、ポスター発表473件(ポストドクトライン講演15件を含む))でした。また、若手優秀発表賞の審査ノミネートは220名であり、そのうち20名が受賞されました。さらに、シンポジウム16件(109講演)、レクチャーシリーズ3件、インフォーマルミーティング8件が行われております。

企業展示は日刊工業広告社が担当し、30社近い展示がありました。企業展示の近くにドリンクコーナーが設置され、プログラム委員会の提案で、ポスター発表も同じ階として、多くの人が集まることができるレイアウトとしました。また、初めての取り組みとしてレクチャー講演と企業講演があり、それぞれ3件と10件が発表されました。さらに、プログラム委員会の提案でポスターセッションと並行して軽食サービスを実施しましたが、その方法や内容などプラズマ・核融合学会事務局からの提案があり実現したものです。大変好評でしたが、初日はこのサービスの実施を知らず、お弁当やおにぎりを買ってきた参加者も見受けられました。すでに述べた企業講演を取り入れたのに加えて、企業関係者と大学関係者との交流の場を兼ねたレセプションを初日の夕方に設定しました。このように、PLASMA2014を活気あるものにしようとする関係者の意欲は旺盛でしたが、一般参加者への周知徹底が不足していたことが反省点です。

学会2日目の11月19日にホテルオークラ新潟で開催され

表1 回答者情報.

回答者数(人)	201
平均年齢(才)	36.4
平均滞在日数(日)	4.1
平均宿泊日数(日)	3.1

表2 回答者住所.

北海道	1
東北	17
関東	67
中部	50
近畿	48
中国	4
四国	1
九州	12
海外	1

た懇親会への参加者は、事前申し込みで、400人近く、最終的には400人を超えました。

懇親会会場までは貸し切りバ

ス4台をピストン運行し、比較的スムーズに移動ができたと思います。事前申し込み数の情報を得て、400人を想定した料理、飲み物を準備しておりましたが、料理が予想より早く減っていきましたので追加しました。新潟県には100近い日本酒の蔵元があり、銘酒も多く知られておりますが、その中で有名どころの越乃寒梅別撰、メ張鶴雪、八海山本醸造、久保田千寿に加えて、新潟大学のお酒として新雪物語、もりひかり、華甲も提供いたしました。皆さんにご堪能いただけたと思います。さらに新潟大学の学生による「にいがた総おどり」をアトラクションとしました。楽しんで頂けたかと思えます。

PLASMA2014主催のアンケートとは別に、新潟県、新潟市、朱鷺メッセが共同で、11月19日に参加者数995名の20%にあたる201名(新潟県1名を含む)に対してアンケートを実施しております(表1,表2)。回答者の平均年齢は36.4才、平均3泊4日の滞在となっています。住所は関東、中部、近畿が多く、回答者の約23%が新潟観光を実施しております。また、開催期間後半の2日間ですが、新潟のお土産販売コーナーも設けました。プラズマの研究とは別に、新潟を楽しんでいただけたかと思えます。

最後に、今回のPLASMA2014を成功裡に実施できたのも、新潟県交流企画課コンベンション推進グループ、新潟観光コンベンション協会ならびに運営委員会、プログラム委員会、プラズマ・核融合学会事務局および日刊工業広告社の皆様のご支援・ご協力と、各幹事学会・協力学会の委員の皆様、現地実行委員の方々と新潟大学の学生の献身的なご努力・ご尽力の賜物であり、関係者各位に心から御礼申し上げます。

